

經濟論叢

第165卷 第5・6号

富国—貧国論争とミラーの商業=自由論……………	田 中 秀 夫	1
政府・自治体会計の問題点と 制度再構築の方向……………	藤 井 秀 樹	25
廃棄物広域処理の経済性と財政構造(2)……………	八 木 信 一	39
上海汽車による流通経路改革の模索……………	劉 芳	54
「偉大な社会」期アメリカの住宅政策……………	豊 福 裕 二	72
台湾における中小企業政策の展開方向……………	高 杏 華	91
80年代後半期以降における アイワのマーケティング……………	胡 左 浩	115

学 会 記 事

平成12年5・6月

京 都 大 學 經 濟 學 會

富国—貧国論争とミラーの商業＝自由論

ジョン・ミラーの経済思想（1）

田 中 秀 夫

I はじめに

ジョン・ミラー（John Millar, 1735-1801）はアダム・スミスの弟子として有名な法学者であって、その主たる仕事が法と政治の分野にあったことは今では周知の通りである。けれどもミラーの著作を紐解けば、ミラーの関心は相当に広く、同時代の経済問題にもヨーロッパ社会の経済発展史にも、並々ならぬ関心を抱いていたことが分かる。のみならず、文芸や詩にも造詣があり、人間本性や感情、倫理学についてもスミス譲りの考察をした道徳哲学者（社会哲学者）であったと言うことも十分に可能である。筆者は昨年刊行した書物（田中秀夫 [1999]）において、ミラーの二つの主著（『階級区分の起源』と『英国統治史論』）を詳細に読むという試みを行い、ミラーの思想の基本構造については、凡その解明ができたと考えている。しかし、未だ残された課題もいくつかあり、ミラーの経済思想はその重要な一つである。

ミラーの名著『階級区分の起源』（初版1771年，第4版1806年）には、フレームワークとしての生活様式の四段階論（狩猟—遊牧—農耕—商業）以外にも、富裕の行き過ぎによる奢侈的生活の危険、子供・青年や女性の放縦の批判、奢侈的な時代精神への警鐘や、奴隷制批判などの広義の経済論が見られる（田中秀夫 [1999] 第一部を参照）。人著『英国統治史論』（初版1787年，増補第二版1803年）や「統治論講義」には、興味をひく経済論と経済史論が展開されている。

さらに、いくつも残されている「統治論講義ノート」のうち、1787-1788年の日付をもつ浩瀚なセットには、「諸技術と文明における社会の発展」論、諸国民の衰退論、奢侈脅威論があり、師スミスの楽天的な経済論と色彩の違う、悲観的な議論が見られる。それ以前に書かれたと推定される『英国統治史論』第二巻の経済史論、以後のものと思われる第4巻の経済論もあり、それらと講義の議論の関連の考察も必要となる。別の講義ノートには、1760年代からスコットランドで激論を招いた「限嗣相続制」批判もある（田中秀夫 [1999] 補論および [1991] 第5章を参照）。

このような広がりをもつミラーの経済論は、したがって「富国一貧国論争」の文脈でもっぱら構想され展開されたとは言えないけれども、しかしその論争に加わる部分をもっていたことは否定できない。これについてはホントが先鞭をつけている。この論争はヒュームを中心とする論争であるが、少し見ておくことが、不可欠である。

II ホント説とホントのミラー解釈

ホントが「スコットランド古典経済学における『富国一貧国』論争」と名づけ、分析した論争は、小林昇教授が経済学の形成時代、古典経済学の成立に先立つ固有の重商主義時代、原始蓄積期の「英仏経済論争」として研究された論争の一角を成す（小林 [1955], [1961], [1965], [1973]）。その一角は我が国では「ヒューム—タッカー論争」として田中敏弘教授たちによって、再三検討されてきた（田中敏弘 [1971]）。小林—田中世代の研究は、スコットランドを前面に出さなかったが、水田洋教授はパスカルやミークの研究を紹介しつつ「スコットランド歴史学派」と経済学の関係をしばしば問題にしていた（水田 [1968] など）し、その後、ステュアート研究との関連で、経済学とスコットランド、とりわけスコットランド・ナショナリズムとの関係が意識されたこともある（田添 [1973], 川島 [1976]）。確かにスコットランド啓蒙のなかで経済学の形成を問い直すというアプローチが我が国で始まるのは、『富と

徳』の出版(1983年)以後のことであるが、上のような『富と徳』に先行する我が国の研究動向からすると、ホントの問題提起は、迂遠なものではなく、むしろ馴染みのテーマの精緻な(ホントはほんの概観に過ぎないと述べている)再提起として受け止めることができる。我が国の研究と比べたときのホントの独自性は、スコットランドの論争として限定し、そのほぼ全貌を、当事者をおそらく網羅しつつ¹⁾、明らかにしたことにある²⁾。それを可能にした前提条件が、スコットランド啓蒙の概念の確立とシヴィック・ヒューマニズムの概念の利用であった。

ホントによれば、「スコットランドの経済学には、互いに共存しつつ、国際市場を求めて戦った富国と貧国の関係についての明確な論争があった。」それは1752年のヒュームの『政治論集』に始まり、1804年のローダーデール卿の『公富の性質と起源の研究』で終わった。そしてその論争のなかで、商業社会は富を最下層階級にまで普及する歴史的に最初の社会であるという経済学の新しい分析が生まれたが、同時に、その分析に対して、人間社会は時の経過するなかでその徳を保持できるかどうかについてのシヴィック・ヒューマニズムの議論が挑戦した。すなわち、この論争はポーコックのいう「新マキャヴェッリの政治経済学」³⁾からの古典経済学の形成を導いた論争である。

「できることなら万人が、すべての生活必需品と多くの便宜品を完全に所有することによって、自分の労働の果実を享受すべきである。……このような平等は人間本性に最もふさわしいものであって、それが貧者の幸福を増大する程

1) J. アンダーソンを含めるべきかもしれない。

2) 坑夫の隷従の廃止が議論され始めていたスコットランドの石炭業も、この論争に関係があり、改革派の石炭業者(例えばエアシャーのグラスゴウ George Glasgow)は貧国の低賃金が富国に對抗する強力な武器になるかどうかに関心していたという。Whatley [1999] pp. 268-269.

3) ホントはその後、「新マキャヴェッリの政治経済学」について、これまたポーコックの示唆に従って、グズナントを中心に再検討する研究(Hont [1993a])を行い、さらにヒューム公債論についての興味深い分析(Hont [1993b])を経て、ヒュームとスミスの政治思想を「立法者の科学」説に回収するホーコンセンを代表とする見解を批判して、彼らの政治思想は複雑で豊かな固有の内実をもっているという主張を展開するに至っている(Hont [1994])が、こうしたホントの仕事の内面的に回顧することは、改めて行われなければならない。

度は富者の幸福を減少させる程度よりも大きい。」(ヒューム [1967] 33ページ) このような思想をヒュームは商業社会に結びつけ、徳は貧国ではなく富国で可能となると主張した。貧しいが徳の高い国、豊かだが腐敗した国という通念(それは未だモンテスキューの常識であった)を退けたヒュームは、富国の徳の運命、富がもたらす洗練された文化と品格は持続的たりうるかを問題にした。

ヒュームは、長期的には、後進国は先進国に追いつくであろうとしたが、基本的に、力点は先進国の衰退ではなく、世界への富と洗練(したがって新しい意味での徳)の普及にあった。ヒュームは、『政治論集』の論説「奢侈について」(第二版からは「技芸の洗練について」と改題)において「奢侈と腐敗を中心とする歴史的变化の理論から脱却しようとする断固たる試み」(ホント [1990] 464ページ)を行い、「商業について」、「貨幣について」などの論説で、重要なのは貨幣ではない、人門と勤労が保持される限り、貨幣の喪失は恐れなくてよいという一般理論を構築した。しかし、ホントによれば、ヒュームはシヴィック・ヒューマニズムの歴史主義的語彙、マキャヴェッリ的変動の概念を用いて論じた。したがって、ヒュームの主張は富国も衰退を免れないという主張として読むことは容易であって、実際にスキーン、オズワルド、タッカーはそう理解した。そしてヒュームの論敵タッカーは先進国の持続的優位を主張した。ホントによれば、スキーン、オズワルド、タッカーは、諸国民の富の追求にとって貨幣自体は重要でないというヒュームの主張に込められた意図を誤解したのである。

ホントはヒュームとタッカーの説を詳細に分析した後、ウォレス、ケイムズ、ファーガスン、サー・ジェイムズ・ステュアート、スミスに言及し、最後に、ミラー、D・ステュアート、ローダーデールを取り上げている。

講義ノートの経済思想に関するホントの分析は周到に思われる。ホントはスコットランド各地に保存されている統治論と公法に関する10組の講義ノートを調べた上で、ミラーの議論を再構成している。しかし、ミラーの二著作の分析

は、粗略なように思われる。

まず、ホントのきわめて興味深い主張を簡単に見ておこう。ホントによれば、スミス『国富論』の刊行（1776年）は論争の枠組を一変させた。けれども、スミスの議論は複雑で息が長いものなので、それまでのエディンバラ、グラスゴウ、アバディーンの大雑把な議論に、すぐには馴染まなかった。『国富論』刊行後のスコットランドの論争を理解するためには、相互に影響関係のあった3人、ミラーとローダーデール、D・ステュアートの見解を見なければならない。こう述べて、ホントはミラーについて興味深い指摘を行っている。

第一に、ミラーの講義は『国富論』の影響を十分に示している。ホントは『国富論』刊行以前のミラーの議論を、4段階論の採用にもかかわらず、スミスのいうよりハチスンのであると理解する。1771年に始まる統治論、公法論の講義で、ミラーは文明の前進は無限に続くかどうかという「諸国民の衰退」論を取り上げた（Millar [1806] pp. xlvii-xlviii）。ハチスンは諸国家の崩壊を検討して講義を終えたが、富国一貧国関係については伝統的なシヴィック・ヒューマニズムの分析に従って講義した。奢侈は堕落をもたらすが、しかし奢侈は技術や手工業の増進には必要かもしれず、有産者が精巧で秀逸な製品を買っても奢侈、堕落ではない。けれども下層階級は上流階級の生活様式をまねるから、やがて奢侈は疫病のように蔓延する。そうなると、賃金が上がらないと暮らせなくなるので、製造品の価格は高くなり、国外市場で売ることが困難となる（Hutcheson [1746] pp. 321-322）。ホントは、このハチスンの主張と類似したものがミラーに見られるという。

ミラーは、分業が商品を安価にし、職人の人格を歪めることに対して高い代価を支払わなければならないことを認める。しかし、ミラーは商業の衰退を分業の悪影響の結果とはせずに、むしろ奢侈の習慣が、浪費的な地主の従者や家僕から、また怠け者や富者が集まる都会の風習から、職人や下層階級に伝染することが商業の衰退を招くと考えた。財産の移転は事情を変えない。「かつては富み、今は貧しくなった商人・手工業者は、にもかかわらず怠惰の習慣が抜

けない」(Millar [1771-1772] fol. 57) からである。

その結果、文芸がまず衰退し、やがて機械的技術が影響を受ける。怠惰と奢侈は技巧を失わせる。生活が高くつくようになっていくので職人は製品を高くせざるをえなくなる。この過程は職人が生産物を売る市場を見出せなくなるまで続く。より貧しい隣国は容易に彼らに勝利し、職人は没落する。これが奢侈の傾向である。

ホントはこのようにミラーの議論を再構成している。この再構成の骨子は、単純なものであって、ミラーの議論に忠実であると思われるが、厳密に、どの講義ノートどこにあるかの典拠をあげることせず、10組の講義ノートの分析からの再構成である旨、注記しているにとどまる。しかし、このような措置には問題がある。なぜなら、1771年から1790年までの講義ノートから上のような議論が再構成され、それが次に見るような『国富論』以後のミラーの見解(その主要なソースは1787-1788年の講義ノート)と対照されているからである。

このような再構成を受けて、ホントは次に、『国富論』が刊行されると、ミラーの講義は変化したと主張する。その理由は、要するにタッカーとスミスの生産力の理論を受け入れたからということである。

すなわち、ミラーは、問題を二つに分けた。第一に、巨大な富がもたらす奢侈は、ある程度まで達すると、勤勉と節約を消滅させ、技芸の進歩を停止させる懼れがあるという問題。第二に、商業と手工業の発展は、富を導入し、食料と労賃を高価にするので、商品価格を高め、貧国によって市場から締め出され、したがって富国は衰退するであろうという問題である。この考え方はヒュームのものであるが、ミラーはこのヒュームの説はタッカーとスミスによって反駁された——典拠は1780-1781年の公法論講義⁴⁾——としている。このようにミラーは必然的衰退論を退けるに至った。しかし、ホントによれば、学芸の衰退は言うまでもなく、ミラーは依然として、商人の奢侈と相場の精神に憂慮を持

4) 筆者はこの講義ノートは未見。ホントによれば、ここでミラーはタッカーを明示しているという。

ち続けた。こうして、ミラーの場合、古いマキャヴェッリの成長・衰退論が突然中断したままとなったのであるが、このような中途半端な結論になった理由は、タッカーとスミスに与し、ヒュームのものとして理解した説に反対したものの、ミラーは講義の枠組をそのままにしておいたからである、とホントは言う。

III 「統治論講義ノート」(1787-1788年)におけるミラーの経済思想

以上のようなホントの分析は、きわめて興味深いですが、果たしてホントの解釈は支持できるであろうか。以下、少し検討を加えたい。筆者はすでに『階級区分の起源』の議論、および『英国統治史』第2巻のヨーロッパ経済史論、そして講義ノートの経済論についても、ある程度詳細な紹介と考察を行っている(田中秀夫 [1999])が、重複をおそれず、「統治論講義ノート」の議論の骨子をふりかえっておこう⁵⁾。

ミラーは、社会の発展がどこまでも可能かどうかを検討する。

ミラーは、第一に専制政治を問題にする。ミラーによれば、専制は、国民の行政への参加をはばみ、公共の名誉を君主の恣意に依存させ、国民を暴政に服従するように習慣づけ、そして財産を危険にすることによって、国民から活力を奪う。しかし、商業の発展は専制を必然的に帰結するわけではない、としている。

第二は、富裕と奢侈がもたらす柔弱の危険性である。富で柔弱になった国民は、貧しい勇敢な国民の餌食となるのが、過去の事実であった。しかし、この点も過去1, 2世紀の大変革によって変化した。スミスの認識を踏襲して、軍事技術が改良され、常備軍が採用されたことによって、野蛮人は文明国民を征服できなくなった、とミラーは言う。のみならず、ミラーは勢力均衡の思想によって、戦争が次第に外交的交渉に譲ってきたとして、戦争の廃止の可能性さえ展望している。軍事バランスと外交による戦争の廃止の可能性論はスミスではなく、フレッチャーに繋がる思想だと言ってよいだろう(田中秀夫

5) 以下での「統治論講義ノート」からの引用ページは省略する。

[1991] 42ページ、以上の2点についてホントは触れるところがない。

こうした考察を踏まえて、ミラーは商業と諸技術には発展の限界がないかという、まさにヒュームが取り組んだ問題にアプローチする。

第一に、商工業の発展は富裕をもたらし、生計費を引き上げ、賃金を高める。商品価格はその国の技術の改善に比例するから、貧国は富国より安価に商品を得る。したがって「一国が隣国より改善において遥かに発展するときは、いつも市場を奪われ、トレードは衰退し始めるであろう。」けれども、熟練職人は技能の改善、分業の深化によって、より優れた多くの仕事を行うので、賃金上昇は名目的であるに過ぎない。他方、一般の労働者の場合には、こうした利点はない。しかし、農業の場合、土地改良に比例して農業者の利潤は増加する。商業の場合、ストックが増加するとより小さな利潤で取引できるから、商人の利潤は増加する。「どちらの部門でも、事業者は、そのトレードが発展するに応じて、商品価格を高めずに、より多くの賃金を与えることができる。」したがって、先進国は後進国によって市場を切り取られる危険はないと、ミラーは先進国の優位を主張する。

ミラーは発展の限度についても楽観的で、それは遠い先のことであると言う。ミラーが認めるのは、豊かな国民からの資本と製造業の流出であって、これには様々な障壁があるけれども、そうなるのは自然の流れだと見ている。以上はきわめてヒュームに近い。

価格面での問題はないとしたミラーであるが、しかし、巨大な富が奢侈をもたらし、国民のインダストリと儉約を破壊する場合は、進歩を停止させるかもしれない、と言う。

第一に、商業的で富裕な国では国民は富者と貧民に分かれる。前者は快樂に耽り怠惰で浪費的、後者は活動的という「正反対の矛盾する習慣」を身につける。しかし、富者が多数となると、貧民は富者を模倣し、怠惰と浪費が一般化する。

第二に、インダストリの喪失は、まず自由学芸の衰退を帰結する。厳密な学

問は軽視され、皮相な知識が蔓延し、虚飾と動物的快樂が続く。しかし、終には機械的技術も衰退し、市場を失うであろう。

第三に、こうした傾向は歴史に例証をもつ。アレクサンダー大王の時代、アウグストゥス帝の時代⁶⁾、十五世紀のイタリア、ルイ十四世の治世以後のフランス、アン女王の治世以後のイングランド。ただし、アン女王以後の場合、商工業では衰退は観察できない。

最後に、技術・産業の衰退が統治に与える影響として、下層国民が上層へ依存するようになり、国王の収入の減少による権威の縮少の結果、政体が貴族政的になり、ローマに実例があるように、やがて王国が分割されるであろう。

ミラーのこの奢侈の脅威論は、人間の主体的能力としてのインダストリに着眼するものであるが、表面的な議論にとどまっているという印象は否めない。ヒューム、スミスの国民的富裕（必需品と便宜品、奢侈品の区別と前二者の潤沢な供給）の概念は継承されたようには思えない。富を奢侈と等置するミラーの観念は、一見する限りは、ハチスン⁷⁾や、ケイムズ⁸⁾の観念に近く、ミラーはヒューム以前の伝統的な、シヴィック・ヒューマニズムの奢侈概念に回帰しているように見える。しかし、富裕な社会では下層階級も豊かになり、奢侈的になるのは不可避的であるとミラーは見えており、そのこと自体を道徳的に非難しているわけではない。この点が決定的に重要である。問題は奢侈がインダストリのエートスを失わせる可能性の有無である。その可能性があるとするれば、ヒューム、スミスと言えども、警戒するであろう。ミラーは長期の蓋然性を考

6) ヒュームもまた古代ローマの衰退を奢侈に求めたという印象もあるが、しかし厳密には、際限のない征服と統治制度の欠陥によると考えた (Hume [1994] p. 111) のであって、この見解をモンテスキューから学んだ可能性がある。

7) ハチスンの経済思想については田中 [1991] 第2章、Taylor [1965] を参照。スコット以来の研究の蓄積にもかかわらず、また近年のハチスン研究の隆盛 (シヴィック・ヒューマニズムとの関連が関心をひいている) にもかかわらず、ハチスンの経済思想の十分な研究は未だなされていない。

8) ローマはアジアの奢侈に溺れて滅んだというリヴィウスの説は広く受け入れられており、例えば、それを受け入れたケイムズ⁸⁾は奢侈がインダストリを破壊することに警戒を隠さなかった (Kames [1778] p. 473, pp. 463-464, Berry [1994] pp. 175-176)。ヒュームが読んで利用したムロンはローマの衰亡は奢侈の直接の結果ではなく、貧民にパンを支給したために人民が怠惰になったことに求めた。この点については川出 [1996] 247ページを参照。

えて、インダストリの喪失をマクロな現象として考えている。

したがって、今述べたように、「豊かな社会」をヒューム、スミスとともに支持したミラーの奢侈把握は、下層階級の奢侈を否定するハチスン、ケイムズの奢侈観とも基本的に違出し、また当時のスコットランドの一般向けの代表的な雑誌である『ミラー（鏡）』、『ラウンジャー』、『カレドニアン・マーキュリー』などが奢侈を墮落と結び付けて、道徳的に論難し、警鐘を鳴らした（Berry [1994] pp. 173-174）のとも異なる。

以上のような留保を必要とするけれども、講義ノートに依拠したホントのミラー解釈はその限りで概ね支持できそうである。

やがて大英帝国を築いた大ブリテンは、金利生活者国家となって、インダストリを他国に委ね、衰退を経験する。ミラーはそのような未来を予見したとは言えないとしても、奢侈の脅威論は、大きな視野では一定の妥当性を持っているから、古臭い時代遅れの議論であったとすることは、再考の余地がある。

ホントはミラーがハチスンのシヴィック・ヒューマニズムの経済論からタッカー＝スミスの生産力説＝繁栄持続論へ基本的に移行したと解釈するとともに、1787-1788年段階のミラーには依然として二つの思想が混在している、スミス流の生産力説を採用したもののシヴィックな思想がいわば古層として残存している、と捉えた。もっと一般的に、ミラーにおける自然法学とシヴィック・ヒューマニズムの混在説はイグナティエフの説くところでもある（Ignatieff [1983]）が、そのような混在を認めるとして、その混在は『英国統治史論』では克服されているだろうか。

先程みたように、ミラーは、講義ノートで、アン女王時代以後のイングランドでは商業の衰退を観察できないと述べていた。ミラーが、アン女王の治世以来まだ100年にもならないから、この先は不確かであると見ていたのか、アン女王以後のイングランドの商業発展は例外であって、将来に渡って繁栄は持続すると見ていたかは、分からない。しかし、ミラーはこのイングランドの長期の繁栄の理由を考えていたに違いない。そしてその理由についてのミラーの分

析は、『英国統治史論』に刻印されているのではないだろうか。

ミラーは産業革命を把握していなかった (Dwyer [1998] p. 99) としても、商工業の発展した社会の分析を深め、分業=専門化によって個々の労働者は一つの専門的能力を伸ばし他の能力を犠牲にすることになるが、社会全体の仕事遂行能力は飛躍的に増大するという見解を示すに至る。この点については次稿でふれるが、これは歴史の必然的傾向であり、教育によって労働者の他の能力の退化を矯正する必要があるけれども、そうすることによって文明社会は衰退せずに発展するという見解にたどり着けるであろう。ここでは奢侈がインダストリを危険にさらすという脅威論は見られない。

IV 名誉革命後の商工業の発展と重商主義

『統治史論』の第4巻(1803年に増補部分として第3、第4巻が加えられた第2版が出版された)はミラーの遺稿から編集された巻で、1787年以降、おそらくはフランス革命以後に書かれたと思われる。第2章までが本来の統治史論であり、第3章以下は、商工業と自由の関係(第3章)、商工業と知識・学問の関係(第4章)、知識の分割、学問・芸術の分化(第5章)、商工業=富裕と道德の関係(第6章)、学問の進歩と法・統治との関係(第7章)、芸術の発展と統治の関係(第8章)を論じるエッセイから構成されている。第3、4、6章は経済論と呼ぶ論考である。すべてを一括して論じることができればそれにこしたことはないが、ミラーの議論は精緻であり、紙幅の制約もあるので、今回は第3章の議論を主に取り上げ、興味深い分業=疎外論が見られる第4章は次回に詳細に検討する。

第3章「ウィリアム三世の治世以来の製造業、商業、および技術の発展、およびこの発展が自由と独立の精神を普及する傾向」は、『階級区分の起源』にも見られるミラーの得意なテーマを扱った章であり、ここには商業と自由の緊密な関係についてのミラーの基礎理論的な分析が詳細に述べられている⁹⁾。で

9) 以下『英国統治史論』第4巻からの引用はページだけを記す。

はミラーは名誉革命後の経済発展をどのように把握しているか、順を追ってみていこう。

「羊毛業におけるイングランドの自然の有利さは、毛織物業を促進したので、この源泉から生まれたイングランドのインダストリと資本は、他の労働部門にも伝えられ、同じく成功裏に充用されることが期待された。」(p. 102) 海洋国家としての立地ゆえに、商業は拡大し、国内消費を越える財貨を売り捌く外国市場を開くことができた。「政治的自由と安全な財産の所有と享受がもたらす傾向のある原動力と活力を刺激することによって、このような好都合な事情をさらに促進するためには、正規の自由な国制の完全な樹立だけが必要であった。」(pp. 102-103) これは名誉革命で達成されたが、名誉革命はより民主的で「人類の自然権」に最適の政体をもたらした。

「この幸福な時代以来、商業と製造業は新しい様相を呈し、急速に発展し、社会の状態と人々の性格と生活様式に無数の変化をもたらした。」(p. 103)

こうした改善には農業と農畜業に關係する技術の発展が伴っていた。商工業は富と人口を増大させ、食料需要を高める。その結果、農夫の利潤を増やし、農夫の勤勉と活動を刺激する。したがって、商業がないところでは土地の耕作は粗放であり、商業の改善が相当進むことが農耕の諸部門の技術と熟達に先行する。「スミス博士が正しく見てとっているように、土地の耕作が完成するのは、どの国でも、富が普及し、食肉の価格が高くなって、農夫が少なくとも時折は最上の土地を家畜の放牧に充てようとするようになったとき、そして農作物で疲弊した土地を回復させるに十分な肥料を恒常的に得ることができるようになるときである。」(p. 104) イングランドはとうとうそういう状態になっていたが、スコットランドでは、商工業の発展がずっと遅れていたため、未だそうはなっていない。

イングランドの国内商業を促進したこうした事情は、外国貿易にも好都合であって、ジェームズ一世とエリザベス女王の治世には外国貿易の奨励は重要なことがらとなっていた。貿易会社が公共の権威によって設立され、政府の保護

によって、遠方に植民地が形成された。当時の大会社は貿易を独占する排他的特権を与えられていたが、商業の幼年期には、このような規制は、新しい危険な企ての奨励に必要であり、公正に反しなかった。しかし、商業発展が巨大な資本と多数の商人団体を生み出し、適当な利潤を約束する事業にすぐに着手できるようになった次の時代には、このような独占は不都合で有害であると感じられ始めた。ミラーは、続いて、スミス譲りの独占批判を行う。「彼らは独占貿易の対象となる財貨を製造する職人間の競争を阻止し、その結果、当該財貨の質を落とすとともに、量も減らした。彼らはまた財貨の販売における競争を阻止し、その価格を吊り上げるために、市場を枯渇させて独占利潤を可能にした。」(p. 106)

したがって、名誉革命後、こうした排他的貿易会社は次第に廃止され、その貿易は国民全体に開放された。東インド会社の独占だけが例外とされ、きわめて厳格に遂行されている。インドとの距離、インド貿易の規模と特殊性を理由にこの例外を擁護してきた著者がいるが、それは商業的理由からではなく、政治的理由から行われているのであり、また政府から支援されているのは会社が弱体だからではなく、強いからである。

商業規制の制度は、当該貿易会社の奨励だけを目的としていない。政治家は、政府が監視し制御しなければ、私的利益を追求する個人は公共により有益でない貿易部門に労働と資本を充用するかもしれないと考えてきた。したがって、課税、禁止、奨励金などの規制策によって個人は規制されるべきだとされたのである。とりわけ、個別的貿易差額が支持されたが、古い貿易論のこの原則は今ではほぼ論破されたように思われる。消費が生産を越えなければ、すなわち、我々が勤勉な国民なら、全世界との我々のバランスはマイナスにはなりえない。「地球上の流通貨幣量は、自然に、人為的介入なしに、めいめいの国の流通規模に調整される。というのはその折々の不足は、どこでも、その場での価値を高め、均衡が回復されるまでそこへ絶えず流入するようにするであろうからである。」(p. 109)

商業国民は自らの利益の最上の裁定者であり、自らに最も有利と考える貿易を遂行することによって、最大の利益を公共にもたらす。政府の行政官はこの種の事柄について適切な判断を行う資格をもたない。むしろ、彼らの介入は気に入った部門に奨励金を与えることによって、商業資本を自然の道筋と非常に異なる道へと逸らせ、よりわずかな利潤しかもたらさないことになった。この真理については隣国の哲学者たちに負っているが、さらに多く「『諸国民の富の原因』の才能と深みのある著者」に負っている。

このような発言と見解から明らかなことは、ミラーはスミスの重商主義批判を正確に理解し、それを継承しているということである。そして先程の講義ノートの議論とは明らかに水準の異なる経済認識がここにはあると言ってよい。ホントのいうように、『国富論』を学んでからのミラーの経済認識は変化したと言えるであろう¹⁰⁾。

ミラーは、さらにこう述べている。この新学説は、大人数の団体の私的利益と結びついた根強い偏見と対立して、商業国民の上層の階級から普遍的な支持を得た。このことは商業改良の高度な発展と経済学の視野の広い見解の決定的な証拠であり、それが現代の際立った特徴である。

そして商品流通を容易にする手段の増大は商業の規模が拡大した別の証拠であるとして、貨幣、約束手形、銀行、国債を説明したミラーは、こう問題提起する。「我が商業政策のこのような前進的改善のなかに、我々が確認できるのは商業で長く繁栄の利益を享受してきた国民の姿である。そしてなお残された問いは、こうした幸福の順調な保有と日々の増加が、自由の高邁な観念、および自らの特権を護ろうとする強い熱意を国民にどの程度抱かせる効果があるかである。」(p. 114) こうしてミラーはスコットランド啓蒙の思想的核心理とも

10) ほぼ同じように、イグナティエフは、『階級区分の起源』と『英国統治史論』の間に、『国富論』を読むことによって生れた革命的变化を見ている。すなわち対象としての社会を「家族」の集合体、網状組織として把握する社会観から、人々が交換によって生活する「市場社会」への転換が発生したという (Ignatieff [1983] p. 322, 邦訳『富と徳』539-550ページ)。イグナティエフは変化を強調するくらいがあるが、少なくとも『英国統治史論』第4巻の解釈にとっては彼の研究は顧みられるべきである。

いうべき、商業=自由論の検討に入る。

V 商業=自由論

ミラーによれば、自由の精神は商業国では主に二つの事情に依存する。第一に、財産と生活手段の配分との関連での人々の状態であり、第二に社会成員が相互に交際し、一致して行動する容易さである。

1 第一の原因論：経済的原因

第一は分配論であるが、自由との関連で論じる点にミラーの独自性がある。ミラーはこの分配-境遇論を相当に詳しく述べている。まず、ミラーは、商業国の財産と生活手段は、スミスに依拠して、三つの源泉、すなわち土地なし水の地代、資本の利潤、労働賃金から生まれるとし、住民は地主、資本家、労働者に分かれるという。ミラーは明確に資本 (capital) と言い、資本家 (capitalist) と言っている点は注意すべきであろう。

労働者は財産を持たないので、雇用者に依存し、雇用者に対立することを避けようとするから、雇用者の意思に服従する習癖を持つ。けれども、社会の全般的状態が異なるにつれて、労働者の相対的な状態は変化する。未開な国では、家内奴隷制が排除されているところでも、労働者は主に奴婢か農奴であって、生涯同じ人物に仕えるから、彼の影響力は甚大である。しかし、商業国では労働者と雇用者の紐帯は次第に緩くなる。最も多数をなすのは商工業に従事する労働者であり、彼らは多くの顧客のための労務に従事するので、主人との関係は薄いものとなる。一国が急速に商業の発展をすると、労働需要が高まり、賃金が上がり、雇ってくれと言う代わりに、就業してくれと懇請される。そうになると彼らはある程度の富裕と重要性を享受するようになり、それはしばしば傲慢と放蕩を生み出す。

ブリテンの労働者は暫くの間、このような羨むべき状態にあった。高賃金、職人を確保する困難、賃金を規制したり、就業移動を禁じたりする立法府の愚

かな試み、下層階級が自らの私的権利と政治的権利を擁護して示した熱意、とりわけ、このような性向が彼らの上位者に与えた警戒心と驚きなどから明らかである。

「労働者が特定の商品を生産しおわるまで、賃金を受取らずに、生活できるほどの財産を獲得したとき、彼はそれを販売して、彼の労働の通常の価値を越えた利潤を得るであろう。彼の資本の拡大に比例して、彼の生産は、彼に従属する働き手の雇用によって、増大し、彼の利潤は、もちろん拡大する。」(pp. 117-118) こうして商品生産が拡大し、複雑になるにつれて、製造業は漸次様々な部門に分割され、いくつかの階級、製造業者、職人 (tradesmen)、および商人が生まれる。

ミラーは商業利潤の源泉を問題にして、製造業者の資本と商人の資本を区別し、前者を流通資本、後者を恒久資本と呼ぶ。そして製造業者は多数の労働を結合することで、それぞれを離れた独立の職人が造る場合の運送費と時間を節約し、そうすることで労働の短縮によって得るのに劣らない利潤を得ることを指摘している。またミラーはスミスに従って工場内分業の利益を、熟練、移動によって失われる時間の節約、単位時間あたりの仕事量の増加、質の上昇、労働の容易化を指摘して、巨大であると指摘している。ミラーによれば、機械などの恒久資本は、労働を短縮し、容易にすることによって、利潤をもたらす¹¹⁾。こうした考察を総括して、ミラーは利益が最終的には労働から引き出されるということは自明に思われるかもしれないが、商人、製造業者のすべての利潤が労働から引き出されるわけではないと主張し、労働価値説を否定している。ミラーは、スミスが十分に統一できずに併存を許した投下労働価値説と構成価値説のうち、リカードと対蹠的に、前者を捨てて後者を探ったわけである。彼は資本を稼働させる努力、仕事の各部門を遂行する上での注意と技量、不確実な成果をまつ不便に対して正当な報酬を引き出す。このようにミラーは利潤の源

11) ミラーのこの思想は偶クレイグに継承され、その著作で再論される。また利潤を機械=資本の産物とする見解はローダ・ゲールにもあり、ミラーの影響と推測される。

泉を3つ挙げているかにみえるが、最後の源泉は無視して、前者を資本の利子、後者を商業行為の賃金と説明している。

こうして資本から収入を得る人々は、自らの貨幣の利子で生活する貨幣所有階級 (monied men) と、自己資本から利潤を得るか、他人の資本で取引をして賃金を得る冒険商人 (mercantile adventurer) からなる。両者は普通の労働者よりずっと独立しているが、貨幣階級は冒険商人より独立している。

資本家の二階級の資本の増加率、職人になっていく労働者数、下層階級から上昇し、様々な商業部門に従事する多数の人々、どれくらいが大財産をすでに獲得し、また獲得しつつあるか、相互の競い合いと交流がどれほど普遍的に勤労の習慣を広め、怠惰を追放し、快適な生活を営める収入を稼ぐ力を個人に与えたか。こうした点で名誉革命後にブリテンで生じた変化を考えると、「人格的独立の感情」を普及し、「全般的自由の高度な観念」を抱かせる力をもっていたことは疑えない。

ミラーは、こうした商業について言えることは、耕作者と地主にもほぼ言いうると言う。農夫 (farmer) は製造業者と類似の事情にあり、地主の地代は商業利潤と類似しており、両者は同じ原理の所産である。

農業が未発展の貧国では、耕作者は土地所有者に依存した召使であるが、農業の発展は耕作者の地位を高める。自作農の業務が広範になるにつれて、彼の資本は大きくならねばならない。彼が改良により多額を投じるにつれて、彼はより長期の借地権を得なければならない。「彼はこうして以前の依存から全面的に解放され、自らの富裕さに比例して企業心をもつようになる。そして借地権の満了に際して、良い農場を得ることは彼の狙いであるのと同じく、良い借地人を得ることはすべての地主の利益であることが判明する。これが暫くの間、イングランドの農夫の全般的な状態であったし、スコットランドのより改良可能な地域では農夫はこの独立状態に急速に向かって進んでいる。」 (p. 127)

この傾向はブリテンではなお急速に進んでいる、とミラーは言う。生活の総ての技術における (in all the arts of life)、またすべての仕事ないし職業にお

けるこうした改善の傾向は常に、他人の気まぐれに従属したり、他人の不興を心配したりせず、人々が自らの才覚を発揮して生活できるようにすることである。この独立としての自由はミラーが繰り返して説いた指導原理であり、信条である。

しかしながら、このような独立は必ずしも財産の不平等を妨げるものではない。「財産の不平等な分配は、異なった程度の熱心さ、あるいは能力の必然的帰結であって、この差異は無数の偶然と作用しあって、個人の金銭的成果を妨げたり促進したりする。したがって貧者はしばしば富者の好意を得ることで自らの利益を求めようとする。」(p. 128) ミラーはこうした不平等を政治的に規制しようとするべきではないと言う。「富の自由な蓄積を制限する、公共の側のいかなる試みも、国民的繁栄の基礎である勤労ないし努力に致命的であろう。」(*ibid.*) 健全な政策にとって必要なのは、個人が自らの労働の成果を享受できるといふ見込みから常に活動への刺激を得ることである。

しかしながら、商工業が高度に発展した国では、政府が介入せずに、自ずから、未開時代には暴政と抑圧の源泉となった「巨大な財産格差を緩和する傾向」(p. 129)がある。多数の人が金銭的職業に従事するところでは、類似の状況にある多数の競争者はほとんど同じ程度に成功するということにならざるをえない。そして彼らの得た富は、「社会に危険なほどの富の増人を妨げるように相互に釣合をとる」(*ibid.*)であろう。「普遍的に広まり、ある点では平等に広まった、そして社会の状態からも、公共の思慮を欠く規制からも妨害を受けない同じ精神は、梯子の頂上から底辺まで隙間なく、富裕の段階を形成する傾向があり、異なる階級の絶えざる接近を引き起こし、下層階級が上層階級に急迫することを可能にする。」(pp. 129-130)

ミラーは水平化としての平等は退けたが、階級格差の接近としての平等は、発展した商業社会の事実としてこのように認識するとともに、これを支持もした。さらにミラーは財産の移転という概念を導入して、格差の縮少を説明する。

富の優越は、商業国では、所領の頻繁な譲渡によって、さらに減少する。下

層階級は、境遇からしてもっと良い暮らしをしたいという気持ちを持ち、蓄積を可能とする勤勉と節儉の習慣をもつようになるが、大財産に生まれついた者は怠惰で放漫になり、高くつく生活をするので、しばしば所領を手放さざるを得なくなる。こうして、裕福な家族が速やかに貧乏になり、下層階級の職業人にとって代られる。彼らは土地を購入し、労働の目的である優越を得ようと努力するのである。しかし、成り上がり者の子孫は、たいてい奢侈と浪費に耽るので、「財産の逆転」を経験することになる。こうして「財産は通常、絶えざる持ち手の交代に従うのである」(p. 131)。

商業が所領の崩壊を脅かすや、こうした旧家の没落を阻止することは、ブリテンと大陸諸国の重大な課題となった。そこで「所領を拘束し安定させるために限嗣相続制が発明された」(*ibid.*) が、役に立たなかった。このような規制は時代の習俗に合致しなくなったとき、もはや強制されなかった。イングランドでは限嗣相続制の束縛は、法律家の賢明な見解によって漸次啓蒙され、崩壊したが、スコットランドでは、貴族制的政府がより強固に根を下ろしており、依然として、強固なままである。ミラーがこのように述べていることは注目に値する。スコットランドでは1760年代の弁護士会の廃止運動にもかかわらず、限嗣相続制は世紀末まで残存した(田中秀夫 [1991] 第5章, Lieberman [1983])。

「ブリテンの富裕は、今世紀に、前世紀を遥かに凌ぎ、貧民が蓄積手段を得るのを容易にし、所領の急速な流通を生み出す人為的な欲求を富者向けに多数もたらし、すべての世襲の影響力の基礎である財産の不変の状態を覆したのである。」(p. 132)

以上が、自由の源泉の一つについての考察である。

2 第二の原因論：社会学的要因

「ブリテンにおける商工業の発展は、自由にきわめて好都合な財産の状態を生み出したのと同じく、それはまた住民を集合させて、彼らの特権を主張する

団結を非常に容易にするような仕方に配置するのに貢献をした。」(ibid.)

第一の原因論は、ほぼスミスにもあるものと言ってよいが、この第二の原因論は、スミスには余りなく、むしろヒュームに近似した見解が見られるものである¹²⁾。

政府が全般的平穩を維持し、平和な生活様式を導入する程度まで確立され、為政者集団が古来の慣行によって固められた権威を与えられ、軍事力に支えられているとき、人々が単独で統治者の抑圧に抵抗できるとは期待できない。古代のギリシャやローマのような小国では、住民は必ず親密な結合と通信を持つようになり、それがあれほど早く小君主を追放し、民主政体を確立できた主要原因のように思われる。しかし、大国では、人々は分散しており、こうした力を発揮することはできなかつた。遠く離れた小さな村に住み、不完全な通信手段しかないので、人々はある地域で暴政に反逆しても、他の地域で反逆が起こるまでに鎮圧された。大国では成員の協力がなかつたので、粗野な君主政体が生まれた。とくに大陸の大国民の場合がそうである。

商工業の進歩はこうした状態を変える。住民は生活資料を得やすくなって人口が増え、職業の遂行に便利のように大集団を成すようになる。村は大きくなって町となり、町は肥大してしばしば大人口を擁する都市となる。そこには労働者と職人の大集団が生まれ、同じ仕事に従事するため、恒常的な交際を通して、自らの感情をすばやく伝えることができる。「強者が弱者を励まし、大胆な者が臆病者を活気付け、決断力のある者が動揺するものを志操強固にさせ、大衆全体の運動は機械の斉一性としてしばしば抗いがたい力をもって進む。」(p. 135) こうした状況では、多数の民衆が不満の声に立ち上がり、容易に結合して不平の解決を要求できる。都市ではちょっとした不平でも暴動の誘因となる。暴動の炎は都市から都市へと広がり、全般的蜂起へとなだれ込む。

こうした結合は地域的事情から生まれるだけではないし、商工業に従事している階級のうちの下層階級に限られるわけでもない。「職業上の目的に絶えず

12) 例えば Hume [1994] p. 232 (ヒューム [1982] 205ページ)。

注意しているので、商人の上位階級は自らの共通の利益を見分けるのに目ざといし、常に疲れを知らずに自らの利益を追求する。」(p. 136) ここまではミラーの商業階級認識はスミスと異ならない。しかし、この先に差異がある。ミラーによれば、農夫は、自分の土地を分かれて耕作しており、自分の利益だけを考えている。地主は自分の欲望を満たす収入を得ることだけを求めているが、しばしば他人の利益にも自らの利益に無頓着である。それに対して、「商人は、自らの私的利益を見逃すことは決してないけれども、自らの利益を同胞の利益と結びつける習慣があり、したがって、常に進んで同じ職業の人々に加勢して、政府の援助を懇請したり、自らの産業の利益のためになる全般的な手段を促進する。」(ibid.)

事実認識ではスミスもミラーと同じである。しかし、評価は違い、ミラーのほうが、商人の行動を肯定的に評価している¹³⁾。それは民衆運動を専制に向かいがちな政府に対する民主的対抗者として評価するからである。「ブリテンにおけるこのような大きな商人の結合の優位は、今世紀の間に、漸次ますます目だったものとなった。大都市の下層民の叫びと暴動含みの行動は行政府の秘密の奥まで貫き、大胆不敵な大臣さえ威嚇し、権力の陰に隠れた最も厚顔の寵臣を解職させることができる。商人的利害の声は、必ず政府の注意をとらえる。そして断固たる全員一致の場合は、国民会議の審議を制御し指導さえできるのである。こうした商人的利害を分割し、その対立を国王の手段に利用しようとして大臣によってしばしば実行される手法は、後にもっと適切に考察されるであろう。」(p. 137)

こうして、ミラーは、次にこの独立と富裕が自由学芸の発展を促進し、知識と学問を国民大衆に普及し、政府の本質に影響を与える意見と感情を導入する傾向をもつ事情の考察に進み、ミラーは学問・技術の分化とその成果と弊害を論じた(第4章)後に、いっそう詳しく学問の分化・専門化を跡づけ(第5

13) この点は、ハーシュマンがつとに指摘し(Hirschman [1977] pp. 92-93)、ベリー(Berry [1997] p. 155)、ドワイアも認めている(Dwyer [1998] p. 90)。

章), ミラーは、「今世紀に生じた民衆の意見の潮流の変化を描写するためには、精神の能力と働きに直接関連する学問を個々に検討し、道徳、宗教、あるいは趣味の問題における思索と議論の進歩が、どの程度、統治との関連での民衆の感情に影響したかを考察する」(p. 173) 必要があると述べて、第6章の商業と道徳の関係論へと進む。

商業と道徳の関連を扱う第6章は第4巻の中で最長編で、このことは、ミラーがこのトピックを重視していたことを物語るであろう。学問の進歩と法・統治の関係を扱う第7章が次に長い。続く第7章は学問と法・統治との関係を表題にしているが、学問の進歩は商業の進歩を基礎としているので、これも広義の商業論(経済論)とみなして差し支えない。このようにミラーの経済思想は、自由との関連で、さらには学問、道徳、法と統治との関連で展開されている点に重要な特徴がある。このような関連を捨象して、単独でミラーの経済思想を取り上げることは、余り意味がないし、間違った理解の仕方であると言っても過言ではない。ただし、ホントが間違った捉え方をしているというのではない。ホントは「富国一貧国論争」のコンテキストでミラーの経済思想をとらえたのであって、それはホントの狙いからして妥当なアプローチである。しかし、ミラーの経済思想を独自に検討するという問題設定をすれば、ホントの設定したコンテキストはまったく不十分であることが分かる。このようなコンテキスト重視の研究はスミス研究では非常に進んでいる。スミスを経済学者と見做し、その経済思想を孤立して取り上げる研究は、もはや研究の名に値しなくなっている。ミラーの経済思想を問題にする時も、隣接領域との関連を視野に入れることがいかに重要か、すでに見てきたところから明らかであろう。スミスと同じく、ミラーは商業=経済を経済の論理と価値からのみ論じたのではないからである。しかしながら、これまでの議論は、ミラーの議論のすべてではない。しかしながら、紙幅の関係で、以下の考察は次稿に委ねることにする。

参照文献

- Berry, C. [1994] *The Idea of Luxury*, Cambridge U. P.
- _____ [1997] *Social Theory of the Scottish Enlightenment*, Edinburgh U. P.
- Dwyer, J. [1998] *The Age of the Passions*, Tuckwell Press, East Linton.
- Hirschman, A. O. [1977] *The Passions and Interests*, Princeton U. P. (ハーシュマン、佐々木毅・旦祐介訳『情念の政治経済学』法政大学出版局、1987年)。
- Hont, I. [1983] “The ‘Rich Country and Poor Country’ debate in Scottish Classical Political Economy” in *Wealth and Virtue*, eds. by I. Hont and M. Ignatieff, Cambridge U. P. (ホント、水田洋・杉山忠平監訳 [1990] 『富と徳』未来社)。
- _____ [1993a] “Free Trade and the Economic Limits to National Politics: Neo-Machiavellian Political Economy Reconsidered” in *The Economic Limits to Modern Politics*, ed. by J. Dunn, Cambridge U. P.
- _____ [1993b] “The Rhapsody of Public Debt: David Hume and Voluntary Bankruptcy” in *Political Discourse in Early Modern Britain*, eds. by N. Phillipson and Q. Skinner, Cambridge U. P.
- _____ [1994] “Commercial Society and Political Theory in the Eighteenth Century: The Problem of Authority in David Hume and Adam Smith” in *Main Trends in Cultural History*, eds. by W. Melching and W. Velema, Editions Rodopi, Amsterdam-Atlanta.
- Hume, D. [1752] *Political Discourses*. (ヒューム、田中敏弘訳 [1967] 『政治経済論集』東京大学出版会)。
- _____ [1994] *Political Essays*, ed. by K. Haakonssen, Cambridge U. P. (ヒューム、小松茂夫訳 [1982] 『市民の国について』岩浪文庫、上巻)。
- Hutcheson [1746] *A Short Introduction to Moral Philosophy*.
- Ignatieff, M. [1983] “John Millar and Individualism” in *Wealth and Virtue*, eds. by I. Hont and M. Ignatieff, Cambridge U. P. (水田・杉山監訳、同上書)。
- Kames, Lond [1778] *Sketches of the History of Man*, 2nd ed., Vol. 1.
- Lehmann, W. C. [1960] *John Millar of Glasgow*, Cambridge U. P.
- Lieberman, D. [1983] “The Legal Needs of a Commercial Society: The Jurisprudence of Lord Kames” in *Wealth and Virtue*. (水田・杉山監訳、同上書)。
- Millar, John [1771] *Observations Concerning the Distinction of Ranks in Society*, London.
- _____ [1806] *The Origins of the Distinction of Ranks*, 4th ed. with An Account of the Life and Writings of the Author by John Craig, Edinburgh and London.

- Millar, John [1803] *An Historical View of the English Government*, 4 Vols., London.
- [1771-1772] *Lectures on Government*, MS. 99, Mitchell Library.
- [1787-1788] *Lectures on Government*, MS. Gen. 289-291 GUL.
- Taylor, W. I. [1965] *Francis Hutcheson and David Hume as Predecessors of Adam Smith*, Duke U. P.
- Whatley, C. A. [1999] "The Dark Side of the Enlightenment? Sorting out Serfdom" in *Eighteenth Century Scotland: New Perspectives*, eds. by T. M. Devine and J. R. Young, Tuckwell Press, East Linton.
- 川島信義 [1976] 「ジェームズ・ステュアートの信用論の展開とスコットランドの金融危機」『経済学論集』西南学院大学, 第11巻2号。
- 川出良枝 [1996] 『貴族の徳, 商業の精神』東京大学出版会。
- 小林 昇 [1955] 『重商主義解体期の研究』未来社
- [1961] 『経済学の形成時代』未来社。
- [1965] 『原始蓄積期の経済諸理論』未来社。
- [1973] 『国富論体系の成立』未来社。
- 田添京二 [1973] 「十八世紀末における経済学の体系化とスコットランド」『商学論集』福島大学, Vol. 41 No. 5。(田添京二『サー・ジェームズ・ステュアートの経済学』八潮社, 1990年所収)。
- 田中敏弘 [1971] 『社会学者としてのヒューム』未来社。
- 田中秀夫 [1991] 『スコットランド啓蒙思想史研究——文明社会と国制——』名古屋大学出版会。
- [1996] 『文明社会と公共精神——スコットランド啓蒙の地層——』昭和堂。
- [1997] 『権威の原理と功利の原理——ヒューム・スミス・ミラー——』『思想』879号。
- [1999] 『啓蒙と改革——ジョン・ミラー研究——』名古屋大学出版会。
- 水田 洋 [1968] 『アダム・スミス研究』未来社。